

高専において期待される女性教員像

島岡 三義・上田 悦子・鬼頭みずき

A Desirable Female Teacher in College of Technology

Mitsuyoshi SHIMAOKA, Etsuko UEDA and Mizuki KITO

工学教育 59 卷, 3 号, (2011), pp. 61 ~ 66.

高等専門学校は高校生世代と大学生世代が同居する、世界にも類を見ない、特異で、なおかつ、技術者教育に成功している高等教育機関である。筆者らが所属する奈良高専（以後「本校」と記す）で女性教員が初めて専任教員として採用されたのが、平成3(1991)年4月であり、実に学校創立28年目のことである。女子学生は1976年に初めて入学してきたので、女子学生がいながら男性教員だけで15年間もの長きにわたって教育、指導を行ってきたことになる。高専の教員は学校運営・教育・研究・課外指導の4足のわらじを履く故に、大学教員兼高校教員の資質を持たねばならない。さらに、高専には「学生寮」があり、本校では100名強の学生が寝食を共にして生活している。宿直を伴う寮生の指導があり、当然のことながら、学校運営に関する校務もあるので、高専教員としての業務を遂行するには、「体力」も必要である。こうした高専の教員の過酷さも、女性進出を阻む要因となっていたかも知れない。また、実社会で女性技術者として問題なくやっていけるような指導も行ってきたとまでは言い切れない。卒業後、技術者としてどう生きていくかの助言が今後ますます重要になり、アドバイザとしての女性教員への期待がますます高まっていくことだろう。

本論文では、本校電子制御工学科に籍を置く2人の女性教員が工学教育の現状について思うことや技術者・研究者として感じ、経験し、問題を克服してきた事例などを紹介している。さらに、高専での教員生活も振り返り、

女性教員として果たす役割、望ましい資質等を男性の島岡だけでなく、上田・鬼頭の両女性教員も自ら述べて、より良い男女共同参画社会の形成へ向けた議論に資するものとしている。

我が国の発展には女性技術者の育成と支援が不可欠であり、女性技術者の育成の拠点とも言える高専の果たす役割は非常に大きい。高専に勤務する女性教員に対する期待度は従来にも増して高まっている。女性技術者の育成や支援と絡めて、男女それぞれの観点から、また、いろいろな視点から、高専において期待される女性教員像を議論した。マイノリティグループに属しても臆しない精神的なタフさがあり、女性であることを強く意識して、多少学生になめられようとも元気に行動できる資質を持ち、さらには、女性技術者・研究者の先駆けとして、特に女子学生の牽引役であるとの意識と実行力を求めたいとした。

本稿では、筆者らの経験、感想の本音を述べている。すでに知らされている事実の類例もあるが、今もって述べられていることから、それらは容易に解決しがたい問題であることを指摘している。

なお、「文系」とか「理系」とかの括りとも関連して、男性向きの学術分野とか女性向きの仕事と決めつけることや、そのような仕分けをする意識をぬぐい去ることも、男女共同参画社会の形成に重要なことではないかと述べている。

